

松雜載

杉
名稱

にあり、此松赤松にして、すべてくる松なしとぞ、田深浦の松は根のあがりたる間を、馬にのりて過べしといひ、紀伊國のも人立て往來すべしといふ、その松の立つゝきたる間いづくのも凡三四町ばかりありといへり、

〔夫木和歌抄二十九〕日向國にことひき松の峯に浪よす

重之

まら浪のよりくる糸ををにすげて風にまらぶることひきの松

〔日本書紀神代〕是時素盞鳴尊、自天而降、到於出雲國簸之川上、時、至期果有大蛇、頭尾各有八岐、

眼如赤酸醬、松。栢生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、

〔倭名類聚抄二十〕杉 爾雅音義云、杉俗用、音杉、一音織、和名須木、見日本紀私記、今案似松、生江南、可以爲

船材矣、

〔箋注倭名類聚抄〕按須、瘦清之義、草類薄條詳之、歧、木也、言細瘦直上木也、本居氏謂進木之義、或

以爲直木之義者、爲非、未深究其語原也、杉見神代紀上、榲見顯宗紀、按集韻云、榲、烏混切、杉木、是榲

訓、杉、非皇國俗用也、又按廣韻於粉切紐、不載榲字、集韻於問切紐、載云、柱也、廣韻又無載、玉篇、榲、於

渾切、柱也、所引文、爾雅釋木、被粘、郭注略同、唯船下有及棺二字、爲異耳、此引音義、恐誤、玉篇粘

作榲、云、杉同上、

〔圓珠庵雜記〕杉、直木すぐきといふべきを略せるにや、

〔倭訓栞須前編十二〕すぎ 杉を訓せり、新撰字鏡に榲とも見ゆ、日本紀に、榲をもよめり、集韻に杉也

と見ゆ、直に生ふるもの故に名とするよし、萬葉集抄に見えたり、げにもはら神木とし、正直の表

物なれば、日本紀にも、石上振之神榲、萬葉集にも、三諸の神すぎなども見えたり、されば我邦の産

まされる事、合璧事類に見えたれば、もと此邦の産にや、本草にも、倭國に生るものを、倭木といふ

と書せる也、神名式には、榲もよめれど、こは榲字の誤にて、訓もぬぎ謬てすぎとなる也、俗に榲字